



[氏 名] 本屋敷 美奈
[出身都道府県] 大阪府
[卒業期] 25 期（平成 14 年度卒）



保健所勤務について

大阪府で卒後 7 年目から 3 年間保健所勤務を経験しました。保健所で求められている医師像は、技術屋で自分の世界に没頭するタイプではなく、コミュニケーション能力が高く、マネジメントが出来る人材だと思います。保健所での主役は医師ではなく保健師やケースワーカー等他の専門職であり、医師はそれを十分に理解しつつ、多職種連携の中で、リーダーシップを発揮し、必要な医学的知識を提供することが求められるのです。これから勤務される方は、まずはそれまでの臨床経験の中での医師としての役割を忘れ、それぞれの機関の保健師、ケースワーカーなど各職種の方々の役割や苦勞を理解し、良い関係を作っていくことをお勧めします。保健所での経験は間違いなく、良い経験になります。皆さんには是非、自分を動機付ける「何か」を見つけて頂きたいです。



よかった点としては、若いうちに、組織の代表として、市町村や病院の代表者と話をする機会に恵まれ、地域連携の中で、地域の機関が地域住民の為に、互いの状況を理解しようと歩み寄り、協力しあう様子を見ることが出来たことです。同僚の保健師やケースワーカーと様々な地域の会議に参加させて頂く中で、完全にシステム化されていないからこそ、個々人がそれぞれの能力や予算の枠を超えて奔走し、そういった中で出来上がったネットワークが予想以上の成果を上げうることも知ることが出来ました。

辛かった点としては、技術職としてのアイデンティティが揺らぐこと、また問題解決の為にはある種の調査やシステム作りをすることが正しいということが他の地域での経験からわかっているにもかかわらず、事業という制約があって一貫性を保てなかったり、現場を変える為には地域のキーパーソンに対する長期間の根回しを必要としたり、常にジレンマを抱えていたことです。

こういった、ジレンマを解決していくためには、与えられた役割以上の実力をつけ、保健師やケースワーカー等での多職種連携の中でリーダーシップを発揮していくことが近道だと思います。しかし、他の職種が公衆衛生の現場の中で人材育成のノウハウを確立しているのに、比べ、医師は公衆衛生医師としての人材育成の意識に乏しく、たまたま持ち合わせた人間的魅力や巡り合った事業とそれまでの臨床的



知識の相性が良く、周囲に認められ力を伸ばすことを出来た人だけが、腐らずにや
っていているように見えました。

そういう意味では、今専門医機構などですすめられている公衆衛生医師のコアの
技術を明確にし、志望する医師に研鑽を積む機会を与えようという動きはとても良
いと思いますし、そういった熱意ある若手保健所医師が研鑽を積むために、職域を
超えて、様々なプロジェクトや事業に参加出来るようになること、その経験を通し
て公衆衛生医師の良いロールモデルを見つけることが出来るようになることが必要
なのかと思いました。